

中川五郎治の種痘法の研究

—— 新たに発見された被接種者 ——

1 小貫の報告に見られる被接種者

中川五郎治の種痘法に關しては、これまで種々論じられて来たが、未だ不詳の点も多い。

その一つに中川五郎治が果して何人に種痘を実施したのかという問題がある。⁽¹⁾⁽¹¹⁾三宅春令の「補憾録」によれば、五郎治は一日八百人に施したというが、接種に用いた痘漿の供給面などを考慮する時、これを直ちに信ずることは出来ない。

五郎治の種痘は、終局的には彼から種痘を受けた者が出たことによつて実証されたのであるが、幼時五郎治から接種を受け、長じて種痘術の伝授を受けた函館の白鳥雄蔵を除外するとわずかに数名が知られているに過ぎない。

これは函館県の衛生係小貫庸徳が明治十八（一八八五）年種痘の事蹟について管内を巡回して実施に調査した報告に基づいている。

彼は五郎治から種痘を受けた経験を有する生存者に会つて、五郎治の種痘術の實際について尋ねたが、明治十八年当時生存していた人は左記の如くであった。

松 木 明 知

松前郡福山 村田 小藤太 六十三歳

小山 安之 五十二歳

坂口善右衛門 六十三歳

同郡江良村 畑谷 宇兵衛 七十歳

檜山郡小砂子村 小山 八百里 五十九歳

同郡江差 尾山 徹三 五十歳

函館大町 田中 いく 七十二歳

右の人物の中、筆者が昭和四十八年に松前町役場などの御好意により入手出来たのは、尾山徹三と畑谷享兵衛の子為蔵の除籍簿のみで、それに記された生年月日と歿年月日を記しておく。

尾山徹三については、天保七年（一八三六）九月十二日生れで、松前郡馬形下町の士族尾山多左衛門の二男であった。本籍地は江差上野の二十九番地で、明治二十二年（一八八九）九月十日に死亡した。

妻ソノは弘化二年（一八四五）三月（日付不詳）生れで、尾山夫妻には実子がいなかったらしく養女を迎えている。

もう一人畑谷宇兵衛も実子はいなかったらしく、為蔵を養子に迎えているが、宇兵衛自身の生歿年月は不明である。為蔵が相続したのは明治十八年（一八八五）一月十六日で、常識的にはこの日宇兵衛が死亡し為蔵が相続したのではなからうか。

宇兵衛の妻フサは、天保三年十月十一日生まれで松前郡福山博知石町の長内喜六の長女であった。

右のうち田中いくは十一歳の時に五郎治から種痘を受けたと言う。これから逆算して田中いくは文政七年（一八二四）に種痘を受けたことになり、これが現在知られる種痘実施の上限の根拠でもある。この他関場不二彦は新井田等と飛内策馬の妻の二人の名を挙げてゐる。

したがって白鳥雄蔵以外に計十人のみが五郎治から種痘を受けた者として現在実証されているのである。

2 菊地の報告に見られる被接種者

今回筆者は、菊地武文が明治十五年に青森県内に在住する中川五郎治から種痘法の接種を受けた者の調査をしている論文を発見した。これは「文政年間ノ種痘家」と題する報告で、従来全く等閑に付されていたものである。短い論文であるから左に全文を引用する。

○文政年間ノ種痘家

在青森 菊地武文

貴社新誌第二百十六號及二百廿號ニ於テ種痘始祖云々一讀予頃日聞ク所ノ一話アリ記メ貴社ニ投ス

松前福山ノ産漁業中川五郎治ナルモノアリ一日本業ヲ務ムルノ際偶暴風ニ遭遇シ魯國ニ漂着セラレ辛フシテ性命ヲ全フスルヲ得タリ而該地ニ留マルヲ若干年當時魯國政府ハ既ニ種痘術ヲ英國ニ求メ之ヲ人民ニ種接スルニ果メ鴻益アルヲ以テ英國ニ謝スルニ數萬元ヲ以テセリト恰モ好シ中川氏此時ニ於テ刻苦勉勵遂ニ該術ヲ習傳スルヲ得帰朝ノ日ニ臨ミ痘苗ヲ携ヘ来リ故國ノ兒女ニ種接シ爾后連綿施術其苗絶セス文政七年一千八百二十四年ニシテモンニツキ氏ノ長崎ニ渡来セシヨリ廿五年前天保六年同十三年ノ

如キ惡痘流行ノ際益奮勵此術ニ従事シ為ニ慘毒ヲ免カルムモノ頗ル多ク爰ニ於テ中川氏ノ名聲遠近ニ著ルムト云于時旧松前藩ノ侍医櫻井小膳君陸軍軍医櫻井直一君ノ実父ナル人アリ京師ニ遊学シ業成リテ帰ルノ日中川氏ノ名聲ヲ聞キ直チニ就テ其術ヲ

研摩シ而メ后之ヲ朋友親戚ノ兒女ニ試ム果メ奏効確實一モ間然スルナク終ニ松前侯ノ聞ク所トナリ中川氏ハ小膳君ノ推挙ニ依リ該藩士ノ末ニ列スルノ榮ヲ得七十有餘歳ニメ没ス后櫻井氏專ラ遺業ヲ負擔シ以テ子弟ニ伝フト云嗚呼櫻井君ノ如キ能ク司命ノ職ヲ尽スト謂フ可キナリ然リ而メ中川氏タルヤ身漁業ニ従事スルノ人タルヲ以テ想フニ學術ノ深淺識見

ノ広狭恐ラクハ桑田広瀬等諸大家ト曰フメ論ス可ラサルハ固ヨリナリト雖モ未開不見ノ地ニ漂流シ身心苦惱ノ間ニアリテ尚能ク精神ヲ爰ニ注キ遂ニ無限ノ幸福ヲ人民ニ與フルニ於テハ其精神ノ卓絶ナル実ニ吾人ノ感戴セサラント欲スト雖モ得可シヤ武文現ニ中川氏ノ施術ニ罹ルモノ松前ノ人ニメ今青森ニ寄留スルモノ二人ヲ目撃セリ其一ハ婦人齡七十上膊ニ於テ瘡痕アリ其一ハ男子齡四十上膊及内股ニ癩痕アリ大抵松前地方四十歳以上ノ人ニメ種痘セシモノハ皆中川氏ノ施術ニ罹リ四十歳以下ノ人ハ大率櫻井氏ノ種接ナリト是ニ因テ之ヲ觀ルニ中川氏ハ本邦種痘家ノ嚆矢トナスモ蓋シ過稱ニ非サル可シ惜哉松前ノ地タル辺境ニ在ルヲ以テ其名隠滅世人種痘家ノ履歴ヲ談スルモ終ニ中川氏ニ及ハサルヲ

報告者の菊地武文については現在のところ何ら知られるところがないが、青森市で開業していた医師であることは間違いない。

報告の前半中、中川五郎治の事蹟、例えば彼が暴風に遭遇したこと、帰国に際して痘苗を携えて来たこと、文政七年（一八二四）、天保六年（一八三四）、同十三年（一八四二）に痘瘡が流行したこと、七十歳で死亡したことなどは誤りかあるいは確証が得られていないことであるが、後半は非常に重要である。

明治十五年当時七十歳の女性と四十歳の男性であるから、明治十八年には各々七十三歳と四十三歳で、前述した小貫の報告に現われた被接種者とは何ら重複していない。

とくに前述した田中いくは松前福山生まれで函館市の大町の商家に嫁した人であり、明治十五年当時青森には寄留していないから七十三歳の婦人は田中いくとは別人である。

四十歳の男性も明治十八年には四十三歳ということになるが、小貫の報告中四十三歳の男性はいない。

菊地の報告した二人は、幼時松前地方で種痘を受け、偶々菊地が調査した明治十五年当時青森県に寄留していたもので、小貫の調査の中には含まれていないと考えられる。なお氏名、接種年月や寄留先ぎについての詳細について知られる

ところがないのは洵に残念である。

関場不二彦によれば、明治三十年当時の調査では元家老新井田等夫人（天保初年種痘）と元町奉行飛内策馬夫人（種痘年月不詳）の二人がいたというが、この二人と青森県在住の二人とは異なる人物であろう。すくなくとも四十歳の男性は異なることは明らかである。

なお十五年当時四十歳以上の人は中川五郎治に、それ以下の人達は桜井小膳に種痘を受けたという伝聞は、五郎治がいままで種痘を実施したか推定する好個の材料でもある。

明治十五年（一八八二）に数えて四十歳とすれば、天保十四年（一八四三）の生まれということになる。そうすると、明和五年（一七六八）生まれで、嘉永元年（一八四八）九月に死亡した五郎治は、もし四十歳の男性が二歳の時に種痘を受けたとすれば、それは天保十五年（一八四五）になり、五郎治は死の数年前まで種痘を続けたことになる。

3 種痘の部位

菊地の報告の中で、興味をひくもう一つの点は、種痘部位についての記述である。

七十歳の女性は上膊に、四十歳の男性は上膊と内股に種痘されているが、左右の別の記載はない。

筆者が秋田で発見した中川五郎治の種痘を伝える「白鳥雄蔵種痘書」によれば、男は左、女は右の上腕に接種するという。⁽¹²⁾これからすれば、七十歳の女性は、左上腕に、四十歳の男性は左の上腕に種痘の痕があったはずである。従来五郎治の種痘に言及した論文で接種部位としての内股を伝えたものはない。これは右上腕の接種によっても善感せず、改めて部位を変えたものかもしれない。あるいは、男性であるため、右上腕に行わず内股にしたのかもしれない。

上膊は常識的であるが、内股については、従来余り例を見ない。

もつとも五郎治から種痘を受けた白鳥雄蔵は、⁽⁴⁾両肘に種痘痕が見られたという。このことからすれば、男は左上腕、女

は右上腕とするのはあくまでも一応の目安であり、事情によっては適宜部位を変えて施術したものである。

4 おわりに

青森在住の菊地武文が、明治十五年当時、青森県内在住し、幕末に中川五郎治から松前で種痘を受けた二人の人物を目撃している事実が判明した。この二人を加えると中川五郎治の種痘の実証を示す人数は計十二となった。

中川五郎治の伝えた北方系の種痘法については、未だ詳かでない点が多いが、さらにこの方面での研究の進展が望まれる。

文献

- (1) 阿部龍夫 中川五郎治と種痘伝来 無風帯社 昭和十八年
- (2) 阿部龍夫 函館の医学と醫人 無風帯社 昭和二十八年
- (3) 関場不二彦 中川五郎治が種痘事蹟附載蝦夷概略 北海医報 六十五号 大正十四年十二月
- (4) 中野操 牛痘日本移入史考(上・中・下) 日本医事新報 八一六〇八号 昭和十三年四月〜五月
- (5) 浦上五六 愛の種痘医 日本天然痘物語 恒和出版 一九八〇年
- (6) 高橋信吉 蝦夷痘徴史考 南江堂 昭和十一年
- (7) 河野常吉 本邦種痘の鼻祖中川五郎治 北海医報 六十四号 大正十四年
- (8) 松木明知 津軽の医史 津軽書房 昭和四十六年
- (9) 松木明知 北海道の医史 津軽書房 昭和四十八年
- (10) 松木明知 統津軽の医史 津軽書房 昭和五十年
- (11) 松木明知 青森県の医史 津軽書房 昭和五十五年
- (12) 松木明知 医学史雑考 津軽書房 昭和五十六年
- (13) 三宅春令 補憾録 嘉永六年
- (14) 菊地武文 文政年間ノ種痘家 東京医事新誌 二二七号 明治十五年

Studies on G. Nakagawa's Vaccination

—New evidence of Nakagawa's Vaccination—

by

Akitomo MATSUKI

G. Nakagawa's method of vaccination, brought into Japan through Siveria, was substantiated by only ten people including Yūzo Shiratori who had received the Jennerian vaccination by G. Nakagawa.

Recently the author found an important article written by Dr. T. Kikuchi of Aomori in 1882 which stated that Dr. Kikuchi met two people who had been vaccinated by Nakagawa in the Matsumae district. One was a 70-year-old woman and the other was a 40-year-old man.

It is unfortunate that their names and the details of Nakagawa's vaccination such as the date of vaccination are still unclear to us.